

1 学校教育目標

<p>人生をたくましく豊かに生き抜くために、考え、鍛え、行動する人間の育成 「生きる力（ZEST FOR LIVING）」の育成を目指し、知・徳・体の調和の取れた人間性豊かな生徒の育成</p>

2 本年度の重点目標

<p>(1) 活気あふれる学校づくりに向けての学校運営組織の活性化 (3) 心の結びつきを基調とした生徒理解・生徒指導、及び学年・学級経営の充実 (5) 教職員個々の資質向上、及びそのための研修の充実 (7) 地域貢献</p>	<p>(2) 魅力的で楽しい学校生活のための生活環境、学習環境の充実 (4) 確かな学力の定着と個に応じた指導の充実 (6) 地域や家庭との連携強化、生徒や保護者との信頼関係の構築</p>
--	--

3 学校評価結果（達成状況） 【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
学校・園運営	○組織運営 ・管理職がリーダーシップを発揮し、大学と連携した学校運営	・年間計画や各分掌の計画などの作成・実施を含め計画的に業務が行えていない面もあり、より一層の業務の効率化を図る必要がある。教育目標の達成に向け学校全体の教育計画を見直す必要がある。 ・大学との連携はもとより、幼・小・中の連携を定例化させなければならない。小学校と中学校の目的をはっきりさせ、一本化したガイドラインを作成し履行できなかった。	B	・学校教育目標を柱に、研究課題を整理することがより重要になる。また、教育目標に即した年間計画の見直しや各分掌の役割や内容の見直しを推進し協働体制の構築を目指す。 ・大学や附属幼・小・中との連携をさらに進めるために、互いの窓口を明確にし、計画的に学校教育目標の具現化に向けた連携を進めるために、教育課題等の共有を図ることで、よりよい教育活動を推進していく。
	○学年・学級経営 ・生徒の主体性をはぐくむ取組 ・互いに認め合い、居場所のある学級学年経営	・生徒指導担当等から、生徒指導に関わる情報をICT(Teams)を介して情報の共有化が図れる環境整備の構築ができたため、他学年の生徒理解や連携がスムーズに行うことができた。 ・複数の教員が担任の意識をもって、「朝の会」、「終わりの会」、「昼食時」等に複数の教職員が様々なクラスの指導に入るようにし、担任以外の教員が生徒と関わりやすい仕組みづくりを行った。コロナ禍による授業時間の確保のため、学活や教育相談などの時間を十分に確保することができなかった。	B	・教育目標の具現化と生徒の発達段階を考慮した学級・学年経営を進めるために、教員の生徒へのかかわり方を共通理解し、生徒主体の学校行事の設定や学校生活の充実をさらに推進する。 ・保護者や地域との連携をより一層密にとることで、学校と家庭、地域の共通理解のもとで指導を進めるとともに生徒理解を一層深める。 ・生徒指導委員会等で、生徒の情報交換・指導方法の協議、検討等を行い、指導方針と方向性を明確にすることで更なる教育効果を目指す。
	○危機管理体制 ・安全な施設設備、教育環境の整備 ・防災教育の充実 ・健康安全教育の推進	・年度当初の危機管理マニュアルを改定する作業はできたが、周知徹底を行うことができていなかった。 ・校内の安全点検を毎月実施するなどしていく必要があった。 ・各教科による防災教育は充実していたが、コロナ禍の影響もあり避難訓練を一度も実施できていない。避難経路の確認のためにも、行う必要があった。	C	・来校者の対応として、検温を徹底し受付で記名シタグを着けることを徹底する。 ・職員会議での危機管理マニュアルの共通理解、不審者対応や避難訓練、瑕疵に対する校内設備の点検を継続して行う。安全点検の徹底を行う。 ・AEDやエビペン等の研修会を開催し、全教職員で緊急時の対応について計画的に研修を行う。 ・緊急対応が必要な場合、大学、附属学校園での連携体制の維持強化を図る。 ・登下校時の交通指導を継続し生徒の安全を確保する。
教育・研究活動	○教育活動 ・個に応じた支援の充実 ・キャリア総合選択授業の充実 ・個々の目標に応じた進路指導の充実	・新しい生活様式の対応や学級経営などICT(Teams、classroom)を活用しながら教師の連携を図り、教員が生徒一人一人に関わる機会を確保することができた。コロナ禍の影響等で気持ちが不安定になる生徒もいたが、多くの教員が関わりを持つことで心的なサポートを行えた。ただ、学級活動では行事等の作業時間になることが多かったため、学級の課題や目標に向き合うことのできる時間を確保することが必要だと思われる。 ・生徒会活動を例年通り実施することが困難であった。生徒会活動は、分散実施や代表のみの実施やICT(Classroom)の活用などで情報共有を図ったが、周知が難しく充実した活動とはいかなかった。	B	・GIGAスクール構想により、ICT端末の利用に向けた研修を重ねるとともに特設ホームページの開設、利用など校内のICT化が大きく進歩した。しかし、新学習指導要領の実施に向けた「授業と評価の一体化」を目指した研修と情報教育及び情報モラルの指導を計画的に進める。 ・総合的な学習の時間を再検討し、キャリア総合の内容や探究活動の推進に向け、地域人材の発掘や大学教員との連携を進める。キャリア教育の推進や、クロスカリキュラム研究を系統的に且つ計画的に進める。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

<p>学校自己評価結果及び改善の適切さについての評価 自己評価は妥当と考えます。 今年度は新型コロナウイルスの影響により十分な対応が難しいなか、色々なことにご配慮いただき取り組んでいただけたことに感謝申し上げます。コロナの終息にはまだまだ時間が必要だと感じております。今年度の経験をもとに来年度以降も継続して改善策に取り組んでいただけたらと思います。 危機管理体制はCとのことですが、コロナ禍の中、大学や附属間連携を取って取り組まれたと存じます。コロナ禍の中だと鑑みると決してCではないと存じました。</p>
<p>自己評価は妥当と考えます。 クロスカリキュラムを手法とするカリキュラムマネジメント、中学校におけるSTEAM教育など意欲的な取組を組織的な行われており、附属学校ならではの研究が行われている。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の適切さについての評価
教育・研究活動	○子供理解 ・道徳科に向けた「考え、議論する」授業の充実 ・仲間づくりの推進、互いに認め合う人間関係構築、人権感覚の育成	・道徳授業改善やその授業のアプローチに挑戦し、今年度も達成できた。一方、コロナ禍の影響を受け計画していた校内研修が行われなかった。実践報告会等を含め、他校とも連携していきたい。 ・今年度はコロナ禍のこともあり、講演会を行うことはできなかった。しかし、人権標語や人権作文の作成を通して、豊かな人権感覚を養うことができた。またICT活用に関係した新たな人権課題についても取り組むことができた。来年度の東播磨地区での発表につなげたい。	B	・授業の中で「生徒同士の対話による思考の深まり」を目指した実践と研究を計画し推進することで、道徳科の授業力の向上と人権感覚の醸成を目指し、生徒の道徳的実践力を高める。 ・講演会等で人権について考える機会を設ける。継続的に「自分自身に関すること」「人との関わりの関すること」「集団や社会との関わりに関すること」のバランスよく取組を進める。	学校自己評価結果及び改善の適切さについての評価 小中学校のICTについて整備されようとしていた矢先のコロナ禍でしたが、今年度はそのコロナの影響により教育・研究活動におけるICTの利用および活用が急速に進められたことは良かったと思います。来年度以降はさらに活用の充実を図っていただければと思います。 ICTを活用されリモートで実践報告会を開催され、内外部に向けて発信力のある取り組みでした。
	○研究活動 ・研究研修体制の確立 ・確かな学力の定着に向けた授業改善	・目指す生徒像の中にある構成概念を教員が共通理解し、その具現化を進めることができた。 ・ICT活用推進を情報担当と行うことができた。ただし、それを通してどのような効果が生まれたかの検証まではまだできていない。 ・ICTの効果的な授業活用の研究もスタートしたばかりである。 ・学年間や教科間での連携の優先順位がどうしても遅れてしまっていた。	B	・クロスカリキュラムを手法とするカリキュラム・マネジメントを主軸にさらなる研究を進める。 ・生徒たちが自立することを主眼に、現研究を基本に大学と連携を取り合いながらSTEAM教育の推進を視野に入れ、取組を推進する。 ・生徒が使用するICT機器の導入実現に向け、より効果的な活用方法の検討を重ねる。並行して、特別支援の観点からの活用も図る。	
	○生徒指導 ・生徒個々の共感的内面理解と人間関係構築 ・全教職員の共通理解と情報共有による問題行動等への協働した対応	・新しい生徒指導のあり方として「何を目的に指導を行うのか」「TPOに応じた指導と支援」をテーマに取組みを促し成果をあげた。 ・各学年で生徒に丁寧な対応、丁寧な指導に心がけたが、不登校生徒の支援体制が充分ではなかった。 ・問題行動の早期発見に努め、共通理解することができた。また、毎週の生徒指導部会が、ただの報告会に終わらないように検討課題を明示した。 ・特別支援教育担当教員との連携と研修の持ち方が課題であり、困り感のある生徒への対応が遅れた。	B	・職員の朝の打合せで生徒指導主任等から報告と連絡を継続的に行ない、教員間での生徒指導の情報共有を密に行う。 ・不登校や問題を抱えている生徒の支援体制として大学との連携を維持・強化を行い指導体制の充実と教職員の資質・能力の向上を図る。 ・支援及び不登校傾向の生徒が多い現状を踏まえ、適切な生徒指導及び指導体制の維持強化を図る。 ・特別支援教育担当の教員との研修の持ち方が課題であり、困り感のある生徒への効果的な対応力を向上させるために、生徒指導と特別支援の合同研修を行う。	
地域・他校種連携	○開かれた学校・園 ・保護者との連携、PTA活動の充実 ・学校からの情報発信・地域貢献	・PTA活動については、教員、保護者が連携し、PTA本部、運営委員会、各専門部が中心となってそれぞれの活動を行った。コロナ禍での活動としてPTA交通指導など改善を行った。今後更に効率的に運営できるように取り組む。 ・ホームページの「お知らせ」欄を活用して、中学校で行う行事や授業、生徒の活躍などについての案内や報告、紹介などを行い、積極的に情報発信を行った。ただ、教科や学年に偏りがみられた。	B	・新しい生活様式に適した新たなPTA活動を検討する。またICT等を活用し、活動内容の効率化を図る。 ・ホームページのお知らせ欄だけでなく、ホームページ全体のリニューアルを行い、積極的に情報発信を行う。	自己評価は妥当と考えます。 公立の中学校より大きな通学区域であるが、地元との連携を大切にされており、また、実地教育については相当負担もおありだと思いますが、今後ともよろしくお願ひします 今年度PTA役員として、コロナの影響で例年通りの活動が行えず大変残念でした。しかし、このような状況でも先生方と保護者が一緒になって何か出来ることはないかと考え、工夫をしながらなんとか活動できたことは本当に良かったと思います。 引き続き、幼・小・大との連携を進め、その成果を中学校の教育活動に活かすとともに、他校、特に近隣市町の学校にも情報提供していただければありがたい。
	○大学・附属連携 ・大学及び附属学校園の連携強化と発達段階に応じた教育活動の充実 ・大学の先生方との積極的な連携、教科等の指導力の向上	・今年度は、コロナの影響もあり三附属連携会議等の会議や研修は行われなかった。 ・大学との連携に関しては、大学教員による講座もある「キャリア総合」が行えなかったり、例年秋に行われる研究大会が行われなかったこともあるが、十分な連携が図られなかった。 ・一部の教科・教員においては、大学の教員と共同研究を行ったり、学部の中実習のリフレクションの講義を担当したり、大学院の授業の一環として附属中学校の授業を参観し、リフレクションなどの連携をする場面も見られた。	B	・大学との連携をより推進するために、三附属連携会議を計画的に行うなど年間行事に組み込み、明確化する。附属学校園として、幼・小・中学校の連携を計画的に進めることで、より充実した教育を推進する。 ・キャリア選択総合授業等で大学や地域と連携を強め、より高い学問の専門性を目指すことで、教職員の資質向上や生徒へのより専門的な学習を提供するために、窓口の明確化と計画的な取り組みを推進する。	
	○実地教育 ・教員に必要な素養を高める指導と教員自身の資質能力の向上	・今年度はコロナの影響で実習期間も短くなったが、マンツーマンで学級指導、教科指導とも例年と同じように行うことができた。 ・実地教育を指導する立場としては、入れ替わり来る学生に十分な指導ができなかった。母校実習に必要な日数の実習を終えるの方がよいと感じた。 ・大学の指導教員と中学校の指導教員の反省会は、オンライン会議で行い、実習生の授業の様子や生徒への接し方など例年通り情報共有を行うことができた。	B	・効果的な教育実習を目指すには、大学教員と本校実習教科担当教員との連携を深めることが重要である。何をどのように指導しどのような教員の育成を目指すのかを共通理解し実地教育に臨むのか明確化し更なる連携体制の強化を図る。 ・教育実習生の評価方法や評価基準について中学校と大学で検討し共通理解を深めることで実習生の資質、能力の向上を目指す。 ・「実地教育サポートガイド」を活用し、より質の高い実地教育の実施を行う。	